

開発、破壊、冒涇の言説 ～自然に対する人的操作の研究～

国際シンポジウム

development.destruction@gmail.com

基調講演:

ジョン・ウェイレン・ブリッジ博士
シンガポール国立大学

「最後の木が切り倒され、最後の魚が食され、最後の川が汚染されて、初めて人は気づくだろう。お金を食べては生きていけないことを。」

—アラニス・オボムサウイン

日時: 2015年

10月31日(土)

11月1日(日)

沖縄キリスト教学院大学大学院
異文化コミュニケーション学研究科

国際シンポジウム
開催のご案内と報告論文の募集

沖縄キリスト教学院大学大学院異文化コミュニケーション学研究科では、第2回国際シンポジウム「開発、破壊、冒涇の言説 ~自然に対する人的操作の研究~」開催にあたって、報告論文を募集しております。奮ってご応募下さいますようお願い申し上げます。

報告論文の要旨の申し込み締め切り：2015年8月31日（1500文字程度）

論文のタイトル、所属、職務、メールアドレス、電話番号を明記のうえ、下記のメールアドレスまでお送り下さい。

development.destruction@gmail.com

「開発、破壊、冒涇の言説 ~自然に対する人的操作の研究~」国際シンポジウム<概要>

主催：沖縄キリスト教学院大学大学院異文化コミュニケーション研究科

開催日：2015年10月31日（土）

場所：沖縄県中頭郡西原町字翁長777

沖縄キリスト教学院大学

シャローム会館1-1、1-3、1-4、1-5

使用言語：英語、日本語

シンポジウムの目的：

『最後の木が切り倒され、最後の魚が食され、最後の川が汚染されて、初めて人は気づくだろう。お金を食べては生きていけないことを。』

クーリー・インディアンの予言より

文学や芸術、宗教をとおして崇拜されると同時に、「自然」は人類の搾取の対象にもなってきました。物質主義や消費社会の高まりと共に、「自然」は、自由市場経済や資本主義によって、商品へと変えられてきたのです。人類の自然に対するあくなき欲望と操作。それは「開発」や「破壊」、自然という神聖なるものへの「冒涇」という言説のもと、とどまるところを知らずにエスカレートし続けています。企業戦略や政策などに垣間見られる「自然」を巡る言説。この国際シンポジウムでは、そのような言説が映し出す現実や曲げられた事実を明らかにするべく、積極的な対話を持ちたいと思います。

「自然」や「環境」、「進歩」や「開発」など、調和しながらもぶつかり合う言説を時空や文化を越えて批判的に議論し、概念の再定義や再構築に挑みます。下記のような概念が議論の例となります。

- 1) 自然を巡る言説の実践。経済発展や安全保障、軍事的拡張や技術革新の名の下に「開発」されるべき対象としての自然。
- 2) 人類に使用されるべき道具としての自然。自然の頂点に君臨する存在とされる人類と自然との力関係。
- 3) 人類のリソースとしての自然。食料確保や医療のための遺伝子操作など、人類の資源としての自然。
- 4) インスピレーションや崇拜、祭事の対象としての自然。聖地や保護区など、精神的価値としての自然。
- 5) 哲学的知見の対象としての自然。人類の利害から独立した存在としての自然。